

## ささやきボイスシリーズ 4

シチュエーション：優しい年下彼女とひみつの時間（日常）

### キャラ設定

上原みもり（19）

大学1年生。

工学部・情報工学学科

占い好きでタロットが出来る。的中率は99%以上100%未満。

### ◎外見

身長：148センチ

体重：上記身長で標準的な体重。

バスト：Dカップ

黒髪で低い位置でのポニーテール。

容姿は少し幼さが残るものの可愛らしい。目がぱっちりしている。

おっとりとした性格。

### ◎家族構成

父、母、みもり、妹（12）

父親は普通の会社員で課長補佐。

母親は専業主婦。趣味でビーズアクセサリを作っておりネット販売もしている。

妹は6歳下で現在中学3年生。受験シーズン突入前の夏休みをどうするかが今の悩み。

至って普通、かつ平穏な家族構成でとても穏やかな家族。

### ◎特技・エピソード

昔から感が強く、また強運の持ち主。

自分が見る占いは大抵良い結果ばかりで悪い結果を見ることが少ない。

実は類まれにみる強運の星を持っている。

テストの山も9割はあたり勉強量のわりに好成績。

不良に絡まれても決して被害に遭うことがない。

小学5年の時に自分の強運から占いに興味を持ち、比較的入門書も多いタロットを始めた。

この占いの的中率がかなり高く、それが噂になって中学時代は1回100円で占いの依頼を受ける程。そのためおこずかいには不自由はなかった。

彼女を知る人の中で伝説になっている出来事が。中学3年時の文化祭で先生に冗談半分で文化祭の成功を占ってほしいと言われ占ったところ死者さえ出かねない最悪な結果に。

占い結果から最悪になるだろう原因が火災だったため当日は火を扱う出し物は禁止され、また放火等の警戒を厳重にしたところ元卒業生が空き教室に火を放つところを発見。無事

に最悪な結果を回避した。

この事が噂になり非公式ながら地元警察から事件の占いを依頼されるということが。

彼女の占い結果から防犯対策や事件捜査をした結果、地域の治安が改善され、また事故、事件ともに過去 30 年間で最も発生率が少なくなるという事を行った。

唯一の欠点はなぜか宝くじや賭け事だけは当たりにすることがない。

これは占ってもこれらの結果の原因に介入できないからではないかと彼女は考えている。

### ◎将来の夢

本人はこのまま占い師でもやろうかと考えていたが、もし自分の思考をトレース出来るものが作れたら簡易的な占いツールでお金が稼げるのではと思い高校から IT の道を志すように。

将来は自分と同等の占い結果を出す占い AI を作り出すのが夢。

### ◎性格・人物

おっとりとした性格ながら頭の回転は非常に速い。

前述の強運のせいもあるのか常に心に余裕があり、人にもとても優しい。

妹の面倒見も良く妹、妹の友人からも非常に慕われている。

同級生の男子からはあまり人気はないが、なぜか年上からはとても可愛がられる。

### ◎主人公設定と主人公への思い。

主人公は警視庁刑事部特殊捜査課・警部補。27 歳。

みもりの噂を聞いて最初にみもりの起用提案をした張本人。みもりと同じ中学を卒業しており事件をきっかけにみもりを知ることになる。

恋人になったきっかけはある事件の捜査の占いで主人公が危険な目に遭う結果を出したこと。

みもり自身、彼を良い人だとは思っていたが恋愛対象にはしていなかった。しかし、この結果に胸がものすごくざわめく事に。

主人公と自分の事を占ってみたら運命の相手であることが分かり、意識することになった。

必死に彼が危険な目に遭う事を訴えるも、主人公は正義感から手を引くわけにはいかないと。そのためみもりは占いの結果から更に占いを重ねて危険の主因を特定して、主人公にその主因に気を付けるように再三に渡って訴えた。

結果、その甲斐あって主人公は軽い骨折だけで済んだ。

被害を最小限に食い止められた安堵感から、彼が好きなんだと完全に自覚し、告白。

彼も不思議とそれを受け入れた。

付き合い始めが未成年だったことから清い付き合いをしている。

言うまでもなく主人公の事を心から思っている。

ープロットー

<チャプター1：お泊りは突然に>

みもりは主人公の家へデートのつもりで尋ねる。

手作りクッキー持参したみもりに主人公も自身で挽いたコーヒーを振舞い、二人は雑談。

話は最近、不審者が出るから気を付けろとの話に発展し、みもりが気になって占ってみるとその不審者事件で死者が出るという結果が出る。

念のためということでみもりは主人公の家に泊まることに。

<チャプター2：いっしょの布団ではじめての添い寝>

泊まる事になったみもりはせっかくだからと主人公と添い寝。

ささやきが最近一部の男性に人気があることを知っていたみもりは主人公にしてあげることにする。

——台本——

<チャプター1：お泊りは突然に>

※部屋に入ってくる

※声、少し離れたところから近づいてく

「お兄さん、お邪魔しますね。」

※↓焼いてきたことに対して弾んだ気持ちで。

「え？上機嫌ですか？ ふふふ、実は今日クッキー焼いてきたんですよ」

「料理はあまり得意じゃなかったんですけど、お兄さんに食べてほしくてお母さんに教えて貰ったんです」

「はい、後で一緒に食べましょう」

「え？今日の服装可愛いですか？」

※↓少し恥ずかしそうに、でも嬉しくもちょっと誇らしげに。

「ありがとうございます。実はお兄さんとのデートだったので服を新しく買ったんですよ？ お兄さんの事を想いながら一生懸命選んだので、そういってもらえてうれしいです」

「ところで、お兄さん。昨日、雨に降られませんでしたか？」

「あ、やっぱり……」

「すみません、実は勝手に占ってました」

※↓デートがなくなるのが嫌だった雰囲気を。

「今日のおうちデートが気になって、お兄さんに何かない事を確かめようと思ひまして……」

「楽しみにしてたので、もしお兄さんに何かがあるなら占い出来る事は全部やるつもりでした」

※↑ここまで。

※↓ここはデートのためなら自分の全力を出していたと言う雰囲気を。

「お兄さんとのおうちデートのためなら例え、お兄さんの案件が重要案件でもすぐに解決してみせますよ！」

「あ、それはやり過ぎですか？」

「え？そんな事はないけど、すぐに解決させられても当たれる人員が限られますか？」

「確かにそうかも知れませんが……って、いつまでも玄関先で話すのもあれなので」

「はい、リビングに行きましょう」

※場面変更

「じゃーん！どうですか？わたしの手作りクッキーです！」

「美味しそうですか？あ、良かったあ〜 今日のために礎になった小麦粉たちが報われました」

「え？失敗ですか？失敗という失敗は最初だけで、2回目からは一先ず食べれるレベルには持っていけてました。でも、味と形にこだわったかったので15、6回は試作を繰り返し

たんです」

※↓ここは恥ずかしがることなく自信たっぷりに。

「名付けて、みもりラブクッキーです！」

※↓何を言っているんですか？という感じで

「え？恥ずかしくないかって？いいえ？事実、これはお兄さんへの愛を込めたクッキーです」

「あ、コーヒータンですね？わたしのクッキーと相性良さそうです！」

「そうだ！お兄さん、はい、クッキーですよ～」

※↓恥ずかしながらもやる気満々に

「何してるのかって？ふふふ、一度やってみたかったんです。はい、あ～んって言うのを」

※↓相手が少し渋っているのを感じ取ったように

「一枚だけですから、ね？」

「はい！それじゃ、改めて。お兄さん、はい、あ～～～ん」

「どうですか？」

「ホントですか！とても美味しいだなんて、嬉しいです！」

「まだまだありますから、たくさん食べてくださいね！」

「そう言えば、今日お母さんに聞いたんですが最近不審者が出るみたいですね？」

「え？お兄さんの担当案件なんですか？」

「そうだったんですね……。実際、どうなんですか？」

「え？若い女性が後を付けられてるって通報が多いんですか……」

「良かったら、占ってみましょうか？」

「はい！任せてくださいね！」

※場面変更占い後

※↓嫌な予感がする雰囲気。

「この結果は……」

「あ、はい。良くないですね」

「引いた三枚が左から恋人の逆位置、戦車の正位置、吊るし人の逆位置となっています」

「左が過去、真ん中が現在、右が未来ですね」

「このカードからだと言った過去に恋愛で良くない事が起きてますね。遊びの恋愛。遊ばれたのか、遊んだかです」

「その結果、現在が戦車で力づくで女性を自分のものにしようとしているみたいですね」

※↑ここまで

※↓これは不味い感じを。

「最後のカードから利己主義とかわがままの意味があるんで、もしかしたら監禁出来る女性を探している可能性があります……」

※ここは思いついたように。

「お兄さん、後をつけられた女性の共通点ありますか？」

「10代後半から20代前半の小柄な女性、帰宅に人気の少ない道を通る……。間違いないですね」

「え？気を付けろですか？た、確かにわたしも小柄ですし、家はちょっと人気のない道を通りますけど……」

「え！と、泊まるんですか！？今から？こんな事が分かったら少なくとも今日は一人で帰せないですか……」

「でも、わたし着替えが……」

「それなら今から買いに行く？本気ですか！？」

※↓右耳に少しずつ近づいて、ふふふ辺りから耳元。ここは少しささやくように

「もう、強引ですね。ふふふ、でもそうやって手元においてでも守ろうとしてくれるところは嬉しいです」

※↓ささやき（無音）で。

「きっと、そんなお兄さんだから好きになったんだと思いますよ」

<チャプター2：いっしょの布団ではじめての添い寝>

※↓少しでもわくわく感を出しつつ。

「お兄さんの寝室入るのは初めてですが……。ダブルベッドですか」

※↓のダメですよ！以降はお兄さんの事を心配しながら注意する感じで

「え？帰ってきてそのまま倒れこむにはダブルベッドは丁度いいんですか？ダメですよ！

ちゃんと着替えて寝ないと！それに歯磨きとかちゃんとしてますか？」

「虫歯になりにくい体質だからいい？ダメじゃないですか！もう……。これからは定期的に泊まりに来ますね？しっかり生活も管理してくださいね？」

「なに、いじけてるんですか〜 子供じゃないんですよ」

※↑ここまで心配した雰囲気で

※↓ここからは少し甘い雰囲気を入れる。でも〜からは少しずつ右耳に近づいて

「でも、今日くらいは……」

※↓ここから完全にささやく（無音）。ささやきは最後まで

「少しくらい甘やかしてあげますよ」

「どうですか？こういうのが最近、流行ってるって友達に聞いたんです」

※↑どうですか？まではささやきで、以降は徐々にもとに戻す。

「え？気持ちよかったですか？ふふふ、それは良かったです。それじゃ」

※↓ここからは完全ささやき（無音）。右耳から

「ささやいてあげますね？」

※↓ここは少し弾んだ感じで

「お兄さんはいつも頑張ってますからね、これはご褒美です」

「そういえば最初の頃からすると、わたし達がこんな関係になるなんて考えられませんでしたね？」

「初めてお兄さんがわたしを訪ねて来た時はびっくりしました」

「なにせ、事件解決のために君の占いの力を貸してくれ、ですからね。最初は何を言っているんだと思いました」

「でも、お兄さんはとても真剣で正義感が熱くて、わたしの占いで事件が解決出来るならと協力したんですよー」

「周りが占いで事件解決するなら警察はいらないっていう周りの声を押し切って」

※↓の一行でささやきながら右から左へ移動

「あの時からお兄さんはとても強引でしたよね」

※↓ここからは左。

「そうでした。アメリカでは占いや心霊能力を捜査に利用するのは当たり前で先人たちの力を使わないのは愚かなことだ。お兄さんの口癖でしたね？」

「そうやって事件に関わって行って、お兄さんに危険な目に遭う結果が出て散々忠告してもお兄さんは聞かなくて。でも、その正義感のおかげでわたしはお兄さんに惹かれていた事

も分かったんですよね」

「お兄さんの事を好きだと自覚してからはわたしの占いもより磨きを掛けて絶対にお兄さんを占いで力になるって決めたんです」

「そう言えば、お兄さんはいつからわたしを意識し始めたんですか？」

「あ、やっぱりお兄さんも危険を忠告した事件がきっかけですかk。ええ。それは、もうどうやったって危険な事をしようとするお兄さんをどうにかするには占いで危険因子を特定するしかありませんでしたから。わたしだって必死でしたよ」

「事件が終わって。わたしから告白して受け入れてもらった時は本当に嬉しかったです」

「あらためて言わせて下さい……。お兄さん、好きです。誰よりも……」

※左耳からここから心を込めて好きという思いを自由に入れてください。途中、右耳へ移動して下さい。

※時間は左右ともに約1分間程度。

※ここは正面で。

「ふふふ、お兄さん顔が真っ赤ですね？」

「え？あんなに好き好き言われたら顔だって熱くなっちゃいます？それもそうですね」

※↓ここから正面から右へ移動

「あ、そろそろ耳の吹きかけやってあげましょうか？」

「右耳から行きますね～」

※ここで約1分間、耳吹きかけをしてください。バリエーションは2種類以上あると助かります。

「ふふふ。お兄さん、気持ちよさそうですね？顔がだらしないです」

「それじゃ、反対側も失礼しますね～」

「左耳にも～」

※同じく約1分間、耳吹きかけをしてください。バリエーションは2種類以上あると助かります。

※左耳のまま

「どうでした？」

「気持ちよかったですか？」

※↓ここは嬉しそうに

「それは良かったです」

「それじゃ、これはとっておきです」

※キス音をまず一回。

「どうですか？」

「興奮しちゃいます？」

「ふふふ。でも、やってほしいんですね？はい、わかりました」

※ここからキス音。左から右にも移動して左右ともに約1分間お願いします。



「あれ？お兄さん？」

「ふふふ、寝ちゃったんですね。お兄さんの寝顔、初めて見ました……」

「いつも頑張り屋さんなんだから……。お兄さん、おやすみなさい」